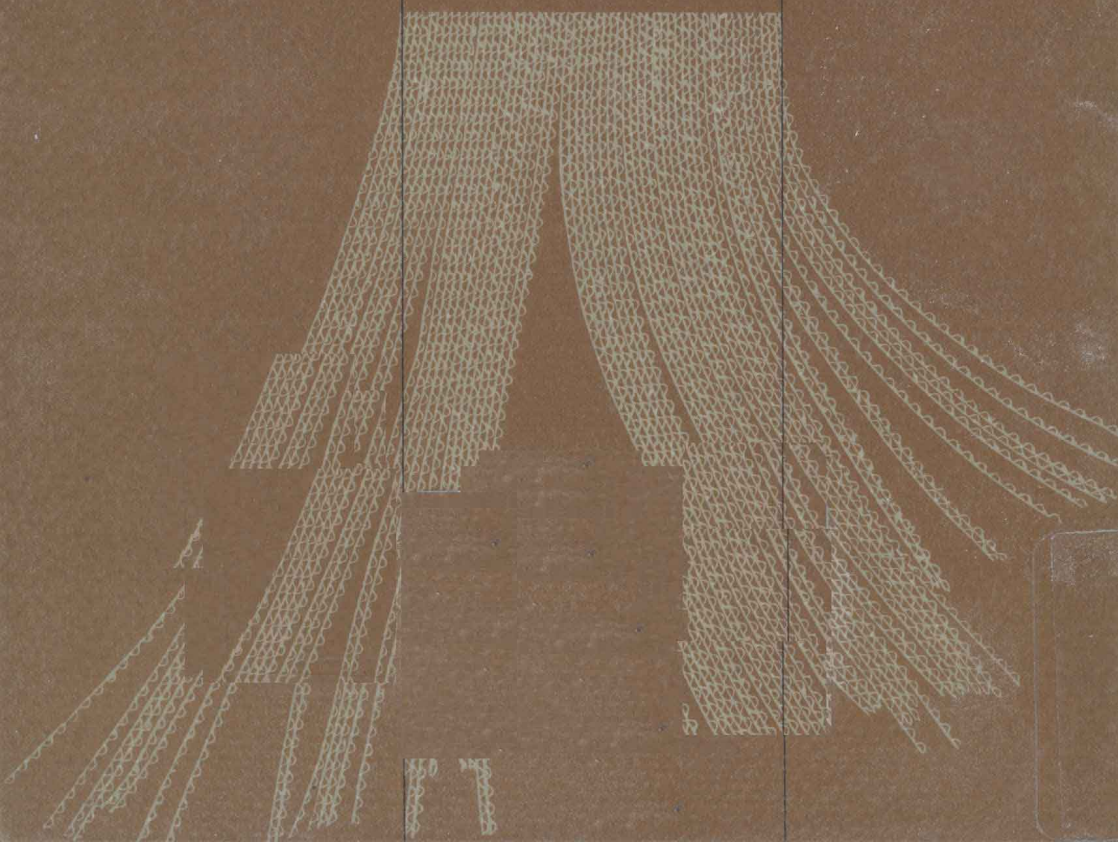


中島陽一郎著

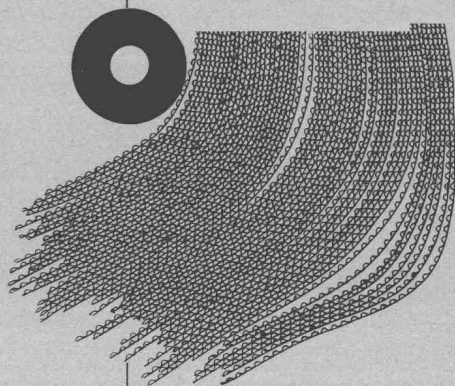
関東大震災

雄山閣BOOKS

9



関東大震災



中島陽一郎著

雄山閣BOOKS 9

はじめに

関東大震災は、その恐るべき天災と人災とのダブル・パンチによって、大正デモクラシーの終りをつげ、また昭和の軍国主義と金融恐慌時代の幕があく前ぶれとなった。

大震災の当時、戒厳令のもとで災害地の治安維持を担当した軍隊の活躍は、それまで国民が軍部に対して抱いていた根強い軍縮思想と不信感をいっぺんに吹き飛ばしたばかりでなく、「ドッコイ、おいらは生きている」とばかり、軍隊特有の擬似デモクラシーとエセ家族主義の二つの仮面をかぶった軍部へ変身する絶好のチャンスにあたえた。

いいかえれば、軍部が大多数の国民の信頼と支持とを震災時における軍隊の頼もしくもキビキビした活躍ぶりをバックに獲得したことは、折りからの政党不信のたかまりと相まって、やがて昭和における軍国主義の抬頭と、あのドロ沼のながいながい大戦争をまねきよせることになった。

人間性を踏みくだいた軍部の人権無視と権謀術数の片鱗は、震災時のどさくさにまぎれて行なわれた、あの人の意表をつく数々の流言と大虐殺とに、すでに集中的に表現されているのである。（例えば甘粕事件「軍人の敵・人道の賊」の項（東京日々）今の（毎日新聞）掲載の論評——二六八頁を参照）

もちろん軍国主義に反対する一握りの人々、すなわち社会主義者や一部の進歩的自由主義者などはいたが、軍

部と警察とによって、虐殺されるか投獄されるか、あるいは非国民のレッテルを貼られて、社会から孤立し隔離されて、沈黙を守ることを強要された。

関東大震災後の日本の一般大衆は、あのセンチメンタルな流行歌「枯れすすき」「かごの鳥」などに、その心情の一端を遠慮がちに吐露するしか手がなかった。

しかし、帝都復興のさいに示された国民のほとぼしるような猛烈なエネルギーと、一枚岩のようなかない団結心、そしてその一方、不幸のなかで互いにたすけあい、また朝鮮人らを命がけでかばった義侠心の厚い、人間としての温みのある人々がいたこと、基礎のしっかりした建物、例えば旧帝国ホテルや、住民が官製の消防隊の力をまったく借りずに猛火を見事に消しとめて、「東京の奇蹟」といわれた地域が、下町などにいくつも焼け残ったことなど、不幸中の幸いともいえるべきで、「日本人の天災にたいする、くるしい戦いと、輝かしい勝利の記録」が無形の金字塔として、関東の天地と、歴史の資料と、そして人々の心のなかに、震災の盛大な供養とともに永遠に残され語りつがれた。

話のもとへもどるが、川田侃東大教授のいうように、「大正デモクラシーの時代から、軍部が独裁権力を獲得して満州事変に突入するまで、わずか十年。日本の議会制民主主義は、ナダレのようにくずれていった」（『朝日新聞』昭和47年2月19日）。冒頭にも述べたように、震災と不景気をキッカケに、金融恐慌と不景気風の大嵐のなかで、尻に火をつけられた形の無力な国民は、軍部から「戦争が近い」と危機感をあおられ、一方では「聖戦」とおだてられて、満州事変・支那事変、やがて太平洋戦争へ拡大するドロ沼のような大戦争へと、しだいに引きずりこまれていった。しかしこれらは、いずれもあとの話であり、また文字どおり「あとの祭り」ともなった。震災後、太平洋戦争の敗戦まで、あの暗黒の「昭和史」については、ここではあえて触れない。ただ大正と昭和の

青春をいろどる民族的良心と香り高き知性とは、その全部を貪欲な軍国主義と侵略的な戦争遂行の怒涛のなかに呑みつくされたわけでは、決してない。

「野火焼けども尽きず、春風吹きてまた生ず」というが、日本民族の良心と自由と、そして真理のために軍国主義と戦って、志半ばで倒れた真の無名戦士（その墓標は国家的にはまだ建てられてはいないが）の存在を無視するわけにはいかない。彼らは、あの大正デモクラシーの延長線上に位置したが故に（つまり早く生まれすぎた先覚者だったという一事によって）軍部の暴力で文字どおり抹殺されてしまったのである。そして日本国民は、関東大震災の後、昭和の敗戦によるあの戦争放棄と主権在民を規定した「日本国憲法」（新憲法）の誕生までの約二十年間というものの、先に述べたように大震災を契機として復活した軍国主義の重圧のもとに、ただひたすらに耐え忍ばねばならなかったのだ。

それにしても、当時の「軍縮」下できわめて肩身の狭い思いをしていた旧軍部と現在の日かげ者の的な自衛隊、某国人などに対していまだに残るいわれなき「差別」、デマに踊らされやすい国民的体質、政治的・経済的危機感、地震サイクルが秒よみ段階に入っている事実——そのどの一つをとってみても、関東大震災当時と今日と、その条件のあまりにもよく似かよっているのに驚かすにはいられない。これらのきわめて酷似した客観条件に対して、意識的または意識下で、慄然とさせられるのは私一人ではなからう。

しかし、かつての大震災のようなデマと虐殺の悲劇と誤ちは、もはや絶対に繰り返してはならないし、また関東大震災・大空襲とすでに二度燃やした東京を、いままた三度燃やすの愚かさを決して犯してはならない。

東京を、三度、燃やすな！

昭和四十八年——関東大震災五十周年に際して

中 島 陽 一 郎

3 は じ め に

はじめに

一、抹殺された予言	3
-----------	---

1 愛妻に「墓前の報告」を遺言した今村東大助教授	3
--------------------------	---

人心をまどわすもの	3
今村博士の地震観	4

2 奇才特有のカンで大震災を予言した芥川龍之介	6
-------------------------	---

狂い咲きの葛蒲に異変予知	6
芥川の「地獄変」さながら	7

芥川の遺した「震災語録」	8
--------------	---

二、大震災の歴史的意味	17
-------------	----

1 直撃する金融恐慌ノ	17
-------------	----

動揺する人心	17
金融恐慌	18

第一次世界大戦後の恐慌	18
軍備縮小から拡張へノ	19

弾圧される社会主義	19
「現実化・大衆化」する労働運動	20

労働者の生活難と社会不安	21
近代生活への転機	22

2 チャンスをつかんだ軍国主義	22
-----------------	----

軍隊まかり通る……………	22
飴と鞭の政治姿勢……………	23
惨劇の張本人は内務省……………	25
虎の門事件の真相……………	26

革命の幻影と白色テロ……………	22
出兵の理由……………	24
虐殺事件はなぜ起こったか？……………	25

三、東京が燃える！……………

1 決死的な震災第一報……………

惨害その極に達す最大の救助を求む……………	27
震源地は相模湾震度6で二時間二〇分続く……………	30

揺れに揺れる余震九百回……………	28
------------------	----

2 火責め水責め戦慄の大竜巻……………

出火の原因は？……………	31
夜半の気温ついに46度に達す……………	34

一挙に三万八千の命を奪った恐ろしい大旋風……………	31
実地調査による火災記録……………	36

3 短命に終わった「地震内閣」……………

余燼のなかで新内閣誕生……………	41
挙国一致の帝都復興計画……………	46

「非常徴発令」で救護物資を確保……………	44
----------------------	----

4 ローソクとパンの原始生活……………

革命さながら……………	47
-------------	----

九月三日にようやく鎮火……………	48
------------------	----

5 大震災の不幸な世界記録

前代未聞の被害状況	48	被害の分布	52
土地の被害	53	建設物の被害	54
交通機関の被害	56	通信機関の被害	60
橋梁の被害	61	公園の被害	62
人類の被害	62	物的損害のトータル	63

四、流言・デマと虐殺の実証的研究

1 流言飛語のほんとうの意味

65

2 必殺仕掛、デマの極秘源

65

流言飛語の震源地	66	戒厳令公布のため計画的デマを放ったとする説	72
軍と警察が主役だとする説	73	近衛・第一兩師団より関東戒厳司令部への報告	74
横浜地方における流言	75	「起因とする説」	80
社会主義者の演説と「罹災民が暴挙にさいして流布した言説」	80	キ印を逮捕した警察	82
つかまつたのはザコばかり	83	流言の発生と変化の粗筋	84
朝鮮人デマの「官主民従説」	86		
流言は何故おこったか?	86		

3 流言マッタノ

87

秩序を保った深谷町の例……………	87	幻覚的な性質の流言……………	88
大地震や津浪再来という予言の横行……………	90		
4 恐るべき群衆心理の実態……………			
群衆の意識……………	92	暗示模倣性の増大……………	93
不可能を可能にする群衆……………	93	群衆の残酷性……………	94
群衆の単純性……………	94	理智的な働きの下……………	95
流言の母体……………	96		
5 デマがデマを生む！……………			
コッケイな流言の例……………	99		
6 朝鮮人暴動！の真相……………			
デマの元兇・海軍無線送信所……………	100	大混乱をきわめた大森大尉の記録……………	105
デマ張本人の訊問調書の中から……………	120	爆弾と放火の流言飛びかう……………	122
北京でとらえた震災ニュース……………	123	元帥と朝鮮人……………	123
当局の取締方針……………	124	流言に対する警戒配置と取締まり……………	125
「不逞鮮人暴動に関する件」と題する報告書……………	129	鮮人の暴行に関する実跡調査報告……………	131
警視庁を走らせた爆弾計画……………	133	流言ばかりで事実無根……………	134
朝鮮問題に関する極秘協定……………	134	戒厳司令官の命令……………	136

軍隊と警官が検問所.....137

朝鮮人は順良.....140

バンザイで迎えられた騎兵の大活躍.....140

思い切った新聞のデマ報道ぶり.....141

人心の動搖に火をつけたデマ.....150

手のつけられない武装集団.....152

朝鮮人の保護状況.....155

自警団の公然たる殺人行為.....160

手のヒラ返したような警視庁.....167

虐殺事件の責任は誰がとる?.....169

7 虐殺の謎? 二人か一万か?

殺害された数字はどれがほんとうか?.....170

東北弁の日本人も殺される.....177

虐殺数と保護検束数.....179

政府当局の事実否認.....138

不徹底な告示.....140

虐殺された犠牲者六千人以上.....141

武装した集団ヒステリー.....150

乱れ飛ぶデマに半狂乱.....151

警察官まで調べられる.....154

人々はなぜ流言に踊らされたか.....158

死体置場から生き返った朝鮮人の体験談.....161

山本首相が苦心の告諭.....168

8 内外人の論評と反省

地震・憲兵・火事・巡査.....180

鮮人騒ぎの調査.....188

事実は何よりも雄弁だ.....195

朝鮮問題の問答集.....186

朝鮮人を自由人たらしめよノ.....193

わが国民性の二大欠陥.....195

上海独立新聞社特派員のルポ.....172

軍隊に死体焼却の指令.....179

五、復活する軍国主義

日本人の集団ヒステリー性	196
外人記者の見た朝鮮人問題	201
一般外人の感想と反応	207

青い眼に映じた関東大震災	196
外人宣教師の批評	205
朝鮮人暴動デマの真犯人は？	216

1 牙をむきだした軍部

戒嚴令の発動と内容	217
戒嚴令の準備と実施	224
刑務所へ兵力を増加	226
戒嚴地域内の警備力の増減状況	238

警備に関する陸軍の活動	221
朝鮮人暴動の流言と取締まり	225
警備部隊の行動	229
震災後のおもな事件	240

2 兵士の銃剣に散った亀戸事件

三日間で拘束者千三百余名	240
--------------	-----

抜刀した警官が検束	241
-----------	-----

3 消された革命家・大杉 栄

ナゾだらけの甘粕事件	242
サル芝居の軍法会議	245
混乱し危機に類したわが国の思想界	247
殺害の決心をしたのは九月五、六日ごろ	248
大杉が外出の帰途を同行する	250

海軍中將の予言適中	245
甘粕大尉の第一回公判	247
社会主義者の不逞行為を恐れた	248
森曹長に話したのは隊を出るとき	249
もっとはかにも殺したいと思った	252

六、復興に江戸ッ子の心意気

ノドを締めて一分間ばかりで絶命	254	社会の混乱に満足そうだった野枝	255
第二回 公判	256	誰が子どもを殺したか?	256
第三回 公判	257	第四回 公判	257
甘粕に懲役十年	261	軍人の敵・人道の賊	268
意外、ナゾの真犯人は?	271		

1 ホラ吹きといわれた後藤新平

四十億円の復興計画が九分の一に削られる	274	避難民千余人に自分の大邸宅を開放	276
穴のあく大風呂敷	276		

2 江戸ッ子ハッスル

大地震さまたま	278	復興節まで大流行	280
「枯れすすき」がヒット	282	震災で生まれた言葉	282

おわりに

おもな参考文献	284		
△付△地震の心得五カ条	286		

関東大震災

—その実相と歴史的意義—

備忘式常仁 !!

震災記念堂

一、抹殺された予言

1 愛妻に「墓前の報告」を遺言した今村東大助教授

人心をまどわすもの

関東大震災がおこる前に、「大地震によって東京は全市が焦土と化するであろう」とズバリ予言したため、人心をまどわすものとして、ときの文部省から大目玉をくらい、また東京帝国大学の地震学主任教授・大森房吉らから手痛い攻撃をうけた同大学地質学教室の今村明恒博士は、大森主任教授のあまりにもはげしい非難をうらみ、愛妻にむかって、

「大地震はかならず五十年内におこる。もしもそれまでに自分が死んだら、大地震のおきたときには、すぐに墓前に報告してくれ」と、遺言したくらいだった。

このように物議をかもした今村博士の論文は、東京二六新聞にも紹介された。

その要旨は、「東京市に大地震が発生する時期が近づいていて、今年より五十年以内には、酸鼻の大地震に遭遇することが確実」だと断言している。そして、市内の災害を予想して、「死者は十万或は二十万に達するはずで、茲に其説を紹介して満都の士女を警む」と結んでいる。

（△東京二六新聞▽ 明治39年1月16日）

また今村博士は、「西洋文明の導入は、用水桶を廃し水道に変えて、それはそれなりに社会生活を便利なものにしているが、（水道管の破裂により）地震発生の折には、東京全市の焼尽にもつながる」と、警告している。そのころ「文明協会講演集」に掲載された同氏の地震観をつぎに紹介しておこう。

今村博士の地震観

帝大地質学教室今村明恒博士は明治三十八年『地震学』と題する一書を著し大森博士に反対して「地震地域内にある東京市は平均百三年で大地震がある。現在の建て物並びに水道設備では全市焦土と化するであろう」といったので大森博士を初め都下の新聞紙から攻撃を受け一世の物議をかもした結果、博士の学説は何等顧みられずして今日に及んだが今回の大災害で全く博士の予言を裏書したこととなった。



地震学教室で震源地調査をしていた博士は「私の学説が的中して大森さんの学説が破れたのはなんたる不幸なこととせう」と稍昂奮したが、間もなく学者らしい冷静にかへって静かに語る「私があの学説を発表した時は八方から攻撃を受けたが、それは東京市は噴火山の上にあるもので危険千万だと論じたので文部省からも、市民はことごとく神経過敏となり不安と恐怖の絶頂にあるから取り消せと大目玉を頂戴したが、私は遂に取り消さなかった。取り消さぬばかりか私は職を賭しても学説の為にたゞかはうと思ったが余り攻撃がはげしかったので、そのまゝ沈黙をつづけたのである。あの時職を賭しても私の学説を主張し市民に警告しておいたなら斯くの如き大惨害にはならなかっただらうとかへすがへすも残念でならない。わたしが飽くまで自説を取消さぬので大森博士は私の学説を反駁して起った。それは大地震は起るとしても数百年の後である、百年ごとと恰

も近き将来に大地震があるやうにいふのは、学術的に根拠なき浮説であるといふのだ。

◇

どうしてかく数百年後といひ百年後といふ二説が生ずるかといふに、大森博士は震源地の範囲を縮小して計算し私のはその範囲を広くとっているからである。別言すれば東京市に大地震の起こるのは東京附近に震源を有するものからだといふのが大森さんの説で、震源地が太平洋であつても東京に大地震が起こり得るといふのが私の説である。そこで東京附近を震源地とする大地震は元禄十六年の大地震から起算し一巡するまで約五百年かかるから数百年後ならでは断じて起こらぬという大森さんの論法が生まれるのだが、何ぞ知らん太平洋に震源地を有する地震によつても東京はマキゾへを食うのである」とこゝで各地から集まった報告を総合して詳細に各地の被害状況を語つた後「私は今でもこの学説を固持している」と断じた。

◇

そこで記者は「然らば百年後には再びこの惨害を繰りかえす訳になりますか」とたづねると「さうです、私の学説からいえば東京は聖上のいます帝都には適しなと思ふ。そこでこの災害からまぬがれる根本策としては帝都を地震地域外に移すより外はない。この附近とすれば上州方面、少し離れれば姫路の播州地方であるが、その外にもいくらかも適当なところがあらうと思ふ。若し移さぬとすれば人為的に耐震策と地震による火災の防止策を講ずるより外はない。火災の防止策としては消火設備と建築法の改正これである。

◇

一体こん度の災害は私の計算で死者十万と見ているが、これは地震の害でなく火災の害のためである。地震としては安政元禄宝永の大地震と似たもので強さも大きさもそれ以上ではない。イタリーの如きはそれ以上の